

**【授業の到達目標および概要】**

病理診断は臨床においては疾病の最終診断とされ、患者の治療方針の決定など、重要な意味を持っている。時には司法の資料、証拠として用いられる。病理組織学診断にあたっては、細胞診断学は時に組織診断以上の知見を与えることもあり、その役割は大きい。臨床細胞学の習得は、病理組織学的な裏付けや種々の診断技術とともに、疾病をより深く理解するために重要不可欠である。

本論ではマクロ、ミクロの対比を加えながら腫瘍細胞の良悪性・組織型など細胞像から判定するのに必要な病理学的背景、標本作製法、組織・細胞像の特徴を学習し、さらに免疫染色などの補助診断法を習得する。

DPに関連して、国家資格を有する職業人として、保健学の幅広い視野に立った高度な学識と専門性を習得するために、疾病・病態の基礎となる解剖学・病理学・細胞学を学び、十分な研究能力を身につけることにある。

**【授業計画】**

- ① 細胞診断学の役割。
- ② 重要臓器の成り立ち。
- ③ マクロをみる。臓器に触れる。(1)
- ④ マクロをみる。臓器に触れる。(2)
- ⑤ 組織標本の作製。標本の見方と切り出し。(1)
- ⑥ 組織標本の作製。標本の見方と切り出し。(2)
- ⑦ 組織標本をみる。(1)
- ⑧ 組織標本をみる。(2)
- ⑨ 基本的な染色法を学ぶ。(1)
- ⑩ 基本的な染色法を学ぶ。(2)
- ⑪ 組織と細胞診を対比する。(1)
- ⑫ 組織と細胞診を対比する。(2)
- ⑬ 免疫染色の基礎を知る。(1)
- ⑭ 免疫染色の基礎を知る。(2)

**【授業外学習】**

学習においては、常に解剖学、組織学、病理総論を念頭に授業内容について整理をし教科書などで確認する。

**【成績評価の方法・基準】**

参加学習態度 50%および課題に対するレポート提出 50%により評価する。

**【教科書】**

大学時代の解剖組織学的、病理学、細胞診断学の教科書を用いる。

**【参考書】**

教科書で十分と考えるが、必要に応じて紹介する。

**【教材】**

特になし。

**【備考】**

授業の場所については、依頼、許諾などの手続きもあるので、その都度提示する。